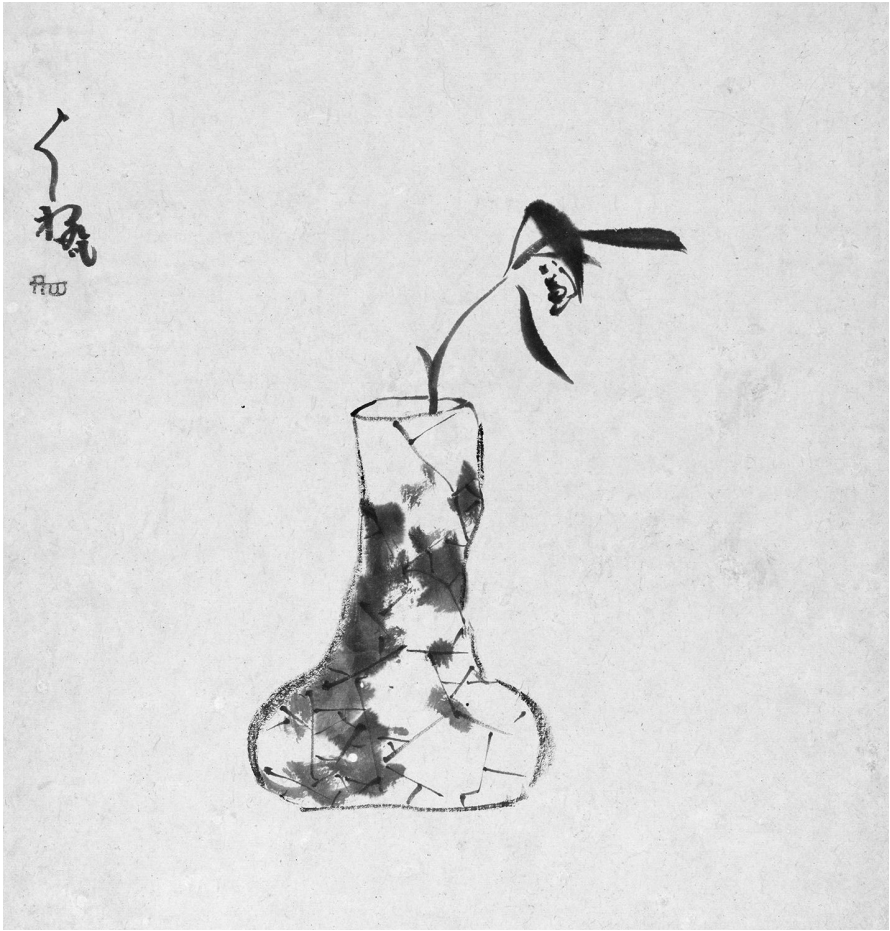
日本中國學會便り

The Sinological Society of Japan | Nippon Chūgoku Gakkai

二〇一九年（平成三十一年）四月三十日
第一號（通巻第三十五号）



八大山人「安晩帖」瓶花図（泉屋博古館蔵）

目録

巻頭言
二　理事長就任のごあいさつ
金　文京
四　「宋明理学国際論壇」参観記
早坂　俊廣
六　国際フォーラム「南京論壇2018」における人文学研究
——活況を呈する最近中国の人文学国際会議
藤井　省三
八　國際中國語言學會第26届年會（IACL-26）
千葉　謙悟
一〇　国内学会消息（平成30年）
二二　令和元（平成31）・2年度各種委員会の構成
二三　委員会報告
論文審査委員会／広報委員会
二三　事務局より
二四　第71回大会開催のお知らせと研究発表の募集

編集◉出版委員会　静永　健
〒819－0395　福岡市西区元岡744　九州大学文学部
メールアドレス：shizuka@lit.kyushu-u.ac.jp
発行◉日本中國學會
〒113－0034　東京都文京区湯島1－4－25　斯文会館内
メールアドレス：info@nippon-chugoku-gakkai.org
日本語版ホームページ：http://nippon-chugoku-gakkai.org/index.cgi

理事長就任のごあいさつ

理事長
金　文京

この四月から二年間、学会理事長をつとめることになりました。就任後最初の「学会便り」ですので、まずは会員のみなさまにごあいさつを申し上げるとともに、今後二年間、学会をどのように運営するか、私の考えを申し述べることにいたします。

昨年、日本中国学会は創立七十周年を迎えました。人間でいえば古稀です。「人生七十古来稀」とは言うものの、最近は平均寿命が延びて「人生七十近来稀ならず」となっていますが、学会はそうはいきません。少なくとも日本では七十年の歴史をもつ学会は、そう多くないはずで、「学会七十」は依然として「古来稀」です。このままのんべんだらりと過ごして、百周年を迎えられるというものではありません。まして世上では人文学の危機が話題になり、新しい元号に中国古典はもう不要との意見もあるようで、中国学、特に古典学の社会的重要性は確実に低下しています。まずは適度な危機感と緊張感をもって任に当たる所存です。

とは言ってもいきなり改革というわけにはいきません。これまでの学会の事業の継続、特に土田前理事長が推進されてきた諸事業の継承と発展が最重要課題となります。これについて以下に主要な三点を挙げたいと思います。

第一は、若手の育成、その意義について説明の必要はないでしょう。具体的には、二〇一一年に「若手シンポジウム」として始まり、二〇一三年の第二回から「次世代シンポジウム」と名前を改めた行事ですが、土田先生任期中の二〇一六年からは毎年行われ、昨年の大会で第五回を迎えました。またその成果は、これも土田先生のご尽力により、ホームページ上で「研究集録」として公開されています。「次世代シンポジウム」は軌道に乗ったと言ってよいでしょう。これをさらに発展させ、今後よりよいものに育ててゆく必要があります。若手の会員諸氏におかれましては、是非ともよいアイデアをもって今年の大会シンポに勇躍応募していただくよう、この場を借りてお願い申し上げます。

第二は、国際化の推進です。これについて土田先生は、「便り」前号の「巻頭語」で、「国際化は学会が避けて通れぬ課題」であり、そのための予算確保に努力されたと述べておられます。また国外会員の会費納入には従来困難がともないましたが、クレジットカードで簡単に納入できる方法も導入されました。さらに土田先生は、国際化が必要な背景として、かつて日本の中国学が世界の中で保持していた存在感が近年徐々に薄れ、転機に直面しているとも指摘されています。私も以前、中国の雑誌インタビューに答えて、近代日本の中国学に天時、地利、人和あり、豊富な資料、高度の漢文読解能力、欧米の研究方法、理論援用の便宜の三点を挙げましたが、今やこの三点について、諸外国に対する日本の優位は失われつつあります。

学界はオリンピックではないので、国別に競争する必要はないという意見はもっともですが、現状ではスポーツと同じく、国別に研究成果を世界に向けて発信してゆく体制になっており、そこには否応なく競争的要素が付随します。またそれは国内における研究環境の充実化とも密接に関係しているでしょう。

中国学にノーベル賞はありませんが、先年、中国学の

ノーベル賞を目指すという趣旨で、唐奨（Tang Prize）という賞が台湾で設けられ、昨年、東洋史の斯波義信先生が日本人として初めて受賞されました。斯波先生が広く国際学界において活躍され、ご業績が世界的に高く評価されたことは周知の事実です。ではそこで国際化のため、学会として何をすべきか。予算は土田先生のおかげであります。ないのはアイデアです。とりあえずは学会ホームページのリニューアルと充実ぐらいしか思いつきません。ほかに何かよいアイデアがあれば、どうぞお寄せください。

第三は、会員減少の問題です。この数年、中国学会の会員数は微減状態が続いており、このままでは将来の活動に支障が出るのではと、危惧の声も聞かれます。しかしこれはおそらくどこの学会も同じでしょう。人口減少の時代ですから、研究者の数が減るのもやむをえない仕儀で、会員数の増減に一喜一憂しても仕方がありません。学会では学生会員、満七十歳以上の会員の会費を減額する処置を取っていますが、会員数減少を食い止める効果は、あまり挙がっていません。

問題はむしろ学会の求心力の低下にあると思います。以前は強固な師弟関係や大学の系列化によって学会の求心力が維持されてきた面が多分にありましたが、今やそういうものは望むべくもありません。今の時代状況の中で学会の求心力を高めるためには、会員にとって魅力的でメリットのある学会を作らねばなりません。

会員の中には、研究は個人もしくは同じ専門の仲間でやればよいので、個々の専門の学会はあってもよいが、中国学会のような何でもありの学会はもはや不要で無縁と感じておられる方も多いと思います。しかし個々の専門領域内での研究だけでは、結局は研究のますますの細分化を招いてしまいます。やはり中国学の広い範囲の研究者が結集する場が必要で、中国学会にはその力があると思います。会員減少問題を解決するには、学会が研究者の交流、結集の場としての魅力をより高めてゆくほかはないでしょう。

以上、三点挙げましたが、もっともな能書きばかりで、次世代シンポ以外には具体策に乏しい感は否めません。ただしこれは学会の構造上やむをえない面もあります。私たちにとって最も重要な仕事は、言うまでもなく研究と教育ですが、従来、それはおおむね大学単位でなされてきました。学会は各大学の活動の上に乗っかって、交流と親睦を深める団体であり、年に一回の大会を開き、学会誌を刊行すれば、それで事足りていたのです。

しかし近年、諸状況の変化により、単独の大学だけで研究と教育を十全に行うことが難しくなっています。そこに学会の新たな任務を見出すこともできるでしょう。現に将来構想委員会や研究推進委員会からは、夏休みに若手研究者を対象とする講習会、または高校生向けの講演会を開いてはどうか、という提案が出されたこともあります。

しかし一方、会員の多数を占める大学教員は、昨今の大学改革などにより用務が急増し、以前にくらべて格段に多忙な境遇にあります。一昔前まで、大学教師はもっとも閑な職業であると言われていましたが、今は少なくとも世間並みに忙しい身分です。日々大学の用務に追われる教員に、さらに学会のために時間をさいて何かやれと言っても無理な相談でしょう。

したがって学会も、毎年の大会を開くのさえ年々大変になっているのですから、それ以外の事業に手を出す余裕などないわけです。つまり時代の変化により、学会がこれまで以上に積極的に活動することが求められているにもかかわらず、同じ時代の変化により、より積極的に活動することが、従前にもまして困難になっているのです。今日の学会が直面する最大のジレンマは、おそらくここにあると言っていいでしょう。

さて、どうすればよいでしょうか。正直言って、私にもこれといっていい考えは今のところありません。しかしながら、最近よく耳にする危機こそがチャンスである、という言葉を信じて、会員のみなさんからお知恵を拝借し、また評議員、理事のみなさんと相談しながら、よりいっそう魅力ある学会づくりのため微力を尽くしたいと思います。どうぞご協力のほど、よろしくお願いいたします。

「宋明理学国際論壇」参観記

信州大学
早坂　俊廣

2018年８月22・23日に上海の復旦大学で開催された「宋明理学国際論壇（暨上海儒学院第二届年会）」に参加した。日本・アメリカ・韓国等の国外からの参加者も含め、総勢90名近くの研究者が集った巨大イベントであった。規模もさることながら、学会そのもののあり方が、歴史的な意義を有するものであったように思われたため、この場を借りて報告申し上げたい。

８月21日、復旦大学間近の上海財富大酒店ロビーで大会登録およびホテルチェックイン。中国の通例で、ここから食・住込みでの学会参加となる。

８月22日、朝８時45分から、復旦大学の呉震先生の司会で開幕式。孫向晨復旦大学哲学学院院長、土田健次郎日本儒教学会会長、辛正根韓国成均館大学儒教研究所所長、朱建民台湾東方人文基金会董事長、張学智国際儒学聯合会副会長の挨拶（肩書きは全て大会手冊に拠る）、及び、

陳来（清華大学）「朱子『太極解義』的成書過程」
ホイト・ティルマン（アリゾナ州立大学）「宋代思想史再思考」

といった先生方による「主題報告」があり、さらには、

楊国栄（華東師範大学）「心学的哲学意義」
崔英辰（韓国成均館大学）「愚潭『四七辨証』在韓国儒学史的位相」
鐘彩鈞（台湾中央研究院）「唐君毅論明代理学」
鄭宗義（香港中文大学）「比対唐君毅、牟宗三的朱熹研究」

といった先生方による「大会発言」も行われた。ここまでで既に、この学会が極めて国際性の高いものであることが存分に体感できた。

準備されていた弁当で昼食を済ませた後（余談ながら、とても美味で高級感あふれる弁当であった。近隣の業者がデリバリーしたものとのこと）、分科会の開始である。Ａ・Ｂ・Ｃの各組に分かれ、それぞれ１時間半の枠（「場」）に４人が報告するスタイルで設定されていた。22日の午後に「第三場」まで、23日は８時45分から開始して「第六場」まで、ブースが組まれていた。つまり、３組×６場×４人＝72人の報告とそれをめぐる討論が繰り広げられたことになる。分科会での報告者は、大部分が中国大陸各地から参加した研究者であるが、日本・韓国・台湾・シンガポールから参加したメンバーもいた。中国の学会では、学会のテーマとあまり関係のない発表をされる方をしばしば見かけるが、今回はほぼ「宋明理学」の発表であった。ただし、そのなかに、いわゆる「新儒家」を主題とする発表がいくつか含まれていた点は、日本との大きな違いであろう。

日本からの参加者の報告は、以下の通りである。

Ｃ組第一場：永冨青地（早稲田大学）「関于白鹿洞書院在明代的出版情況：以白鹿洞本『伝習録』為例」
Ｃ組第二場：鶴成久章（福岡教育大学）「万暦元年浙江郷試的策題――論王守仁的孔廟従祀与浙江王門」
Ｂ組第四場：早坂俊廣（信州大学）「論劉宗周的“意”与“知”：従与史孝復的争論来看」
Ｃ組第六場：井澤耕一（茨城大学）「従晩清経学家看的宋明理学――以皮錫瑞『経学歴史』及『経学歴史』手稿本為中心」

私は「せっかく中国に来たのだから」と、日本の先生方の分科会報告を聞きに行かなかったので、残念ながら、個々の内容について論及することができない（ちなみに、

私の発表時には、土田健次郎先生も含めて日本人全員が聞きに来てくださった。面目無い次第である)。

それぞれのブースについては、構成の意図が明確なものもあれば、緩やかなまとまりのものもあった。私が報告したB組第四場は前者であり、さながら劉宗周検討会の様相を呈した。8時45分からの私の報告に続いて、

高海波（清華大学）「試論劉宗周的格物思想」
翟奎鳳（山東大学）「“主静立人極”断章取義源流考論」
徐波（復旦大学）「由劉戢山“幽暗意識”看宋明理学研究不同的進路」

といった研究発表があり、その後、まとめて討議となった。私の発表に対し、司会の劉勇先生（中山大学）、コメンテーターの方旭東先生（華東師範大学）をはじめ、何人かの方からコメントをいただいた。中国の学会で最も難儀するのがこの時間であるが、今回は、許家晟先生（学習院大学）が通訳を買って出てくださったおかげで、かなりこみ入った質問を理解することができ、意を尽くした回答を行うことができた。許先生には、心より御礼申し上げたい。

分科会全体の雰囲気についても言及しておきたい。報告のレベルという点で言えば、「玉石混淆」と断じざるを得ない。素晴らしい発表も多いなか、当然言及すべき中国国内の先行研究に一切触れずに報告された方もいた。とにかくペーパーを量産しなければならない時勢の弊害であろうか。ただ、中国ではこれだけの数の研究者が「宋明理学」というテーマのもとに結集し得るという事実は、驚嘆に値する。若手の研究者も、傍聴していた学生も、羨ましいほど多かった。今後、この「数」の力が「質」をも急速に押し上げていくことであろう。

分科会第六場の終了後、会場を移して、「閉幕大会」となった。まず、復旦大学の何俊先生の司会で、

ピーター・ボル（ハーバード大学）「金華諸先生是如何与衆不同的？」
土田健次郎（早稲田大学）「朱熹的帝王学」
辛正根（成均館大学）「周濂溪的生態思想」
李存山（中国社会科学院）「宋代的新儒学与理学」

といった「大会報告」が行われた。さらに、陳来先生と呉震先生の司会で、「大会総結」が行われた。発言人は、ホイト・ティルマン先生、ピーター・ボル先生、土田健次郎先生など総勢10名で、リレー式にそれぞれ締めのコメントを発言された。個人的に最も印象深かったのは、陳来先生が、1980年代に杭州で開催された宋明理学関係の全国学会の思い出を語られた場面である。先生は今や中国の宋明理学研究の中心は上海の復旦大学であり、この学会もまた杭州の学会同様に後世に語り継がれていくだろうと力説されていた。

いま書架から、『論宋明理学——宋明理学討論会論文集』『論中国哲学史——宋明理学討論会論文集』（共に、中国哲学史学会・浙江省社会科学研究所編、浙江人民出版社1983年刊）を探し出してきた。「前言」によれば、この2冊は、1981年10月15日から21日にかけて、浙江省杭州市で開催された「全国宋明理学討論会」の成果をまとめたものである。陳来先生が言及されたのは、この学会のことである。この2冊には、中国の研究者の論考しか収められていないけれども、学会には、アメリカ・日本・西ドイツ等の学者も含め、260余名が参加した模様である。私が杭州大学（現・浙江大学）に滞在していた1996年頃にはまだ、この論文集に寄稿された先生方の多くが、ご高齢ながらも活躍されていた。杭州が宋明理学研究の中心であった時代を体感でき、その20数年後に、その中心が上海となった画期的な学会に参加することができた幸運に感謝したい。ちなみに、この学会は、復旦大学哲学学院の経費で開催されたとのこと。「かず」のみならず「金」の力もまた、中国の宋明理学研究を押し上げているということであろうか。

国際フォーラム「南京論壇2018」における人文学研究
——活況を呈する最近中国の人文学国際会議

南京大学海外人文資深教授
東京大学名誉教授
藤井　省三

（一）活況を呈する中国開催の国際シンポ

本通信の楽しみの一つは、毎号掲載される国内外研究集会に関する報告である。特に中国で開催される国際シンポジウムはこの数年で倍増、いや三倍増しているようすで、本誌で読む報告は、中国や世界各地の中国人文学の現状をめぐる貴重な情報源でもある。

私が専攻する現代中国文学に限って回想するに、2011年頃から中国開催の国際シンポが急増しており、私が参加した会議の数は、2014年５回、2015年０回、2016年１回、2017年２回、2018年４回である。2015年が空白で、2016年が一回なのは、私はこの両年に中国以外で開催された国際会議に参加しており、中国開催のシンポは辞退したためであろう。ちなみに国際会議への招聘は一年以上前に発送されることが多いのだが、中国のばあい半年ほど前に行われることが少なくない。このため中国から招聘状が届いた時には、すでに他地域からの招聘を受諾済み、あるいは新しい報告論文執筆の余裕なしという事態が往々にして生じてしまうのである。

（二）アジア・太平洋人文交流等をテーマとする南京論壇

さて今回ご紹介する「南京論壇2018」は、南京大学（以下「南大」と略す）と韓国の崔鍾賢学術院が2015年以来共催してきた国際フォーラムの第３回目であり、亜太（アジア・太平洋）の人文交流と文化イノベーション、科学技術の進歩と社会の発展等々を主旨とし、外国から85名、中国国内から183名を招聘して、南大仙林キャンパスで2018年11月17、18両日に開催された。

初日９時から始まった開幕式では、胡錦波・江蘇省政治協商会議副主席兼南大共産党委員会書記の司会で、呂建・全国人民代表大会常務委員会委員兼中国科学院院士兼南大学長や韓国・SK グループ理事長、南京市長、江蘇省副省長の大学・政治・経済の要人が各10分ほどの挨拶をした。この顔ぶれからも、南京市が本フォーラムを全面的に応援しているようすがうかがわれる。なお紙幅の関係で、本稿では人文学研究者以外の方の氏名は省略したい。

続くは三本立ての「主旨演講」で、第一講師（中国共産党対外連絡部の元副部長）は、貿易摩擦や南シナ海紛争をめぐりアメリカに苦言を呈し、第三講師の時殷弘・国務院参事兼中国人民大学傑出学者兼南大特任研究員は日本人が中国侵略の歴史認識を忘れがちであること等を指摘していた。私は開幕式会場に通じるエレベーターで欧米からの参加者と挨拶を交わした際に、分論壇（分科会）１「海のシルクロードと海洋合作」は熱い議論になりそうですねと噂していたので、第一講師の話は、やはり…と思いながら聞いていた。その一方で、論壇開催直前の安倍首相訪中を契機にネット上から「精神日本人」（日本のミリタリー・ルック等の愛好家）打倒ムードが消えていたので、時氏の話はやや意外であった。

司会者の崔鍾賢学術院院長から、それではアメリカの声を聞かせていただきましょう、と紹介されて登壇した第二講師は、スティーブン・オーウェン・ハーバード大学教授（中国名は宇文所安）で、杜甫詩集英訳注全６巻などの業績を有する唐詩研究の大家であった。オーウェン氏は京都留学時代の見聞なども紹介しながら、文学による世界の相互理解と融和を説いていた。

その後の昼食時間は長目の90分で、午後から五つの分

論壇に分かれる前の内外参加者同士の異分野交流に便利であった。分論壇１「海上絲路与海洋合作」では「美中関係是否滑向新冷戦？」「推進朝鮮半島無核化与和平進程」「美国対一帯一路倡議」など“熱い議論”が交わされたようすである。分論壇２、３、５の「亜太治理創新与可持続発展」「亜太歴史、現状与未来」「医薬生物新技術与生命健康」でも同様であろう。

中国・韓国・日本を主な対象とする分論壇４「東亜文明与文化創新」は、さらに古典中心のＡ組と近現代中心のＢ組とに分かれ、私はＢ組に参加した。同組第一場では長らくシンガポール大学中文系で魯迅論を講じていた王潤華教授（現、マレーシアの南方大学学院講座教授）によるマラッカの中華文化研究、李建軍・中国社会科学院文学研究所研究員による現代中露比較文学研究、詩人で台湾の文芸誌『新地文学』主宰者の郭楓氏による戦後台湾詩論に関する報告が行われた。中央の長机を囲んで司会者、コメンテーター、報告者ら十数名が座り、入口側にパワーポイント用スクリーンが、三方の壁ぎわに30席ほどの椅子が並び、傍聴の教授陣や院生さんが着席する、という会場はワークショップ流の討論には好都合であった。但し議程では90分を各報告に30分ずつ割り当てており、三氏が目一杯報告するため、15分の茶歇（コーヒー・ブレイク）を削減しての質疑応答となった。

第二場は呉俊・南大文学院教授による司会で、鈴木将久・東京大学文学部教授「竹内好思想中的“中国文学”」、王風・北京大学中文系教授の伝統音楽論、そして私の「村上春樹与中国」の報告が行われ、李丹・南大芸術院副教授がコメンテーターを担当した。翌18日午前にも共に南大文学院の王彬彬、張光芒両教授の司会により、葉国良・台湾大学中文系教授「格律詩与自由詩之間」、衣若芬・シンガポール南洋理工大学教授「虚擬的書信――慶祝新加坡建国五十周年電影“七封信”的文本与図像」、張光芒「中国文化与当代韓国文学的関係」、王彬彬「魯迅有関抗日問題的若干言論詮釈」、傅元峰・南大文学院教授「中韓詩歌交流」、李章斌・南大中国新文学研究中心副教授「穆旦詩歌的修辞与歴史意識」の報告が行われた。

このＢ組五場と平行して、分論壇４Ａ組では徐興無・南大文学院院長らの司会で全四場が進行しており、稲畑耕一郎・早稲田大学名誉教授「高羅佩的漢文」、廖肇亨・台北・中央研究院教授「清初渡日華僧的自我書写」、水上雅晴・中央大学教授「年号与日本学術文化」が、また分論壇三では陳捷・東大文学部教授「従岸田吟香看十九世紀七八十年代中日民間往来」、永冨青地・早大教授「王陽明『大学古本旁釈』在日本的接受史」、彭春凌「跨越中韓的儒教改革運動―康有為与李炳憲的交往与思想関係論考」等の報告が行われている。

（三）南京大学の美麗なる仙林キャンパスと壮大な国際会議中心

仙林キャンパスは南京市都心から東へ約20キロの緑豊かな学園地区に2006 ～ 2009年に開設されており、地下鉄南大仙林校区駅前の広大な敷地には格調高くして美麗なる図書館などの校舎群が点在する。校区を縦横に走る二車線道路両脇の歩道には樹齢二〇余年の鬱蒼たる街路樹が並び、新開地とは思えぬアットホームな雰囲気を醸し出している。唯一の欠点は雨天の際の移動に不便なことであろうか。

南京論壇はこの新校区東南の一角に聳える壮大な国際会議中心を貸し切って開催された。この会議中心は建坪6.5万平米、高度40メートル、地上９階地下２階、大小の会議室と朝食・昼食用のピアノ・バー風レストランを備え、上階にはベッド総数約400の客室200余を付設する五星級ホテルであり、集合日を含む全三日間の日程はすべて同中心で組まれた。開幕晩宴では南京の名物料理が供され、2014年の“反腐敗運動”以来“公宴”では影の薄い酒瓶も卓上に配されたのは、国際会議であるためか――輸入ものの紅酒（赤ワイン）と南大ブランドの白酒である。

長年、定員削減・大学運営費削減のダブルパンチを受けて来た日本の国立大学元教授の目で南大を見ると、さすが改革・開放四〇周年を迎えてなおも高めの経済成長を維持する中国の一流大学である、と羨望を禁じえない。もっとも仮に緊縮経済体制を迎えた時には、このような豪華シンポ開催が難しくなるだけでなく、美麗校区の維持にも苦労するであろうとも懸念されるが、これは人口減少に苦慮する日本の貧書生の杞憂であろう。

國際中國語言學會第26届年會（IACL-26）

中央大学
千葉　謙悟

この小文では2018年５月に開かれた国際中国語言学会年会について紹介するが、まずは国際中国語言学会についてやや詳しく見ておこう。本会は1992年６月にシンガポールで開催された第１回国際中国語学会大会(International Conference on Chinese Linguistics, ICCL-1）において創立された。アメリカの法律に基づく非営利法人格を取得するに至って1997年より国際中国語言学会(International Association of Chinese Linguistics, IACL）と改名し現在に至る。学会のニューズレターによれば会員は554人（2018年５月１日時点)。その出身の多い順に並べれば中国171、アメリカ114、台湾77、日本55、香港54となる。理事(Executive Committee）もおおむねこれら出身の会員より選出され、2018年度の会長は中国社会科学院の劉丹青氏、日本選出の理事は石村広氏（中央大学）と筆者である。

IACL は大会を毎年一回開催しているが、おおむねアメリカ本土とそれ以外の国という順序で回っている。アメリカ本土で開催する時は北美中国語言学会年会(North American Conference on Chinese Linguistics, NACCL）と共催するのが慣例であるが、今回は NACCL とは別日程で開催され、代わりに第20届中国語言與文化国際研討会（The 20th International Conference on Chinese Language and Culture, ICCLC-20）との共催となった。

IACL-26は2018年５月４日から６日にかけて開催された。マディソンは1995年の第４回大会以来二度目の開催である。近年の IACL は発表本数が100本を越える大型の大会になっているが、今回は特に発表数が多く、プログラムには招待講演や基調講演も入れて242本もの報告が記載された。日本からは16組18人が参加した。

IACL は類型学、句法・語義、方言、語音、語用、社会言語学、手話、歴史言語学、第一・第二語言習得、音系、韻律、認知・機能語言学といった複数の部会が同時進行する大型の会議のため筆者が実際に発表を聞くことができたのはごく一部に過ぎず、会場で行われた発表内容を幅広く紹介することは難しい。筆者が聞いた範囲内で興味深い発表をいくつか紹介するというスタイルもありえようが、よりマクロな描写の方が IACL という大会の紹介としては適するように思われる。

参加者全員が聞くことになる基調講演はアメリカから William Baxter（ミシガン大学)、James Huang（ハーバード大学)、フランスから Alan Peyraube（社会科学高等研究所)、オーストラリアから陳平（クイーンズランド大学)、台湾から連金髪（国立清華大学)、中国から劉丹青（社会科学院）などといった各氏が担い、各セッションの冒頭に配された招待講演には中国から崔希亮（北京語言大学)、郭鋭（北京大学)、台湾から戴浩一（国立中正大学)、蔡維天（国立清華大学)、香港から朱慶之（香港教育大学)、アメリカから孫朝奮（スタンフォード大学)、陶紅印（カリフォルニア大学ロサンゼルス校)、韓国から厳翼相（漢陽大学）などといった学者が名を連ねた。

William Baxter 教授の基調講演

IACL で学術的に特に

注目を集めるのがYSA（Young Scholar Award/ 青年学者奨）の存在であろう。35歳以下の若手研究者を対象とし、年会での発表を募集する時期に完全原稿を提出して審査を受ける。審査通過者には旅費の補助が学会予算から支出され、またYSA専用の審査委員会（review committee）が設けられており、学会が注力するイベントであることがうかがえよう。審査を通過した最大５人（近年は３人）は大会会場にて発表を行う。そこでの議論を踏まえた審査委員会の報告に基づき理事会で受賞者が決まるが、該当者なしの年もある。受賞者は夜のバンケットの席上で発表される。受賞を逃したファイナリストには最終審査に残った旨を記した証書が発行され、受賞者ともども若手研究者のモチベーション向上に貢献している。今年は倪志佳（北京大学）「官話方言咸山攝一等韻演變的階段性」、王天琳（University of Notre Dame）“How to define linguistic units from a psycholinguistic approach: A case study of morpheme”、楊萌萌（社会科学院）「上古漢語“主之謂”及“主而謂”結構的句法」の３本が報告され、YSAは楊萌萌氏が受賞している。

大型化に伴う祭典化の傾向すら感じられるIACLであるが、そうした学会の常として、特定のテーマについて深く議論をする場というよりは、国内より広い場に自らの研究を発信し、他地域の研究者との交流を持つ場となっているように見える。特に欧米で活躍する研究者に会いやすいのがIACLであり、中国語圏を越えたより広く深い交流を可能にする場でもあるといえるだろう。

IACLは本拠がアメリカにある以上公式には英語が用いられ、例えば会議録やニューズレターは英語で書かれる。一方で年会では中国語か英語での発表が可能である。いま発表に関していえば、IACL-26のプログラムに載った全242本のうち、英語での発表は半数近い110本にのぼる。発表者の大半が中国語圏からの参加であり中国語母語話者であろうこと、その他の地域からの出身者の多くも中国語母語話者であることを考えれば、中国語学において進行する英語化を思わずにはいられない。

むろん日本に拠点を置く研究者に中国語での発表が推奨される流れは不変だろうが、（少なくとも中国語研究における）中国語圏の趨勢を見ると、英語を用いた発表や交流も求められることが増えるかもしれない。

日本からの参加者に限ってみても英語での発表は徐々に増えつつある。今回の発表から挙げれば伊藤さとみ（お茶の水女子大学）“How is contrast marked? -The case of *ne* in Mandarin Chinese”、下地早智子（神戸市外国語大学）“On the Conceptual Structure of "Psych-Verb+死" Compounds and "了$_2$""、竹越孝（神戸市外国語大学）“Altaic Interference in Chinese Grammar: Focus on the Existential Verb "You 有""、林範彦（神戸市外国語大学）“Case-Marking System in Menglun Akeu, a Tibeto-Burman language in Yunnan Province, China”の諸氏の発表および筆者の“On Rimanization *lh* in *Xizi Qiji* 西字奇蹟”のように。

日本からの参加者（一部）

今年の年会であるIACL-27は５月10-12日の日程で神戸市外国語大学にて開催される。日本でのIACL開催は2002年の愛知県立大学以来17年ぶり二度目となる。目下、神戸市外国語大学の方々が精力的に準備を進めてくださっているところであり、世界の研究者が神戸にて文字通り一堂に会する日も近い。マディソンのFairwellでは以下の戯作とともに見送られたものであるが、日本でのIACL開催が神戸牛以上の成果となることを期待したい。（マディソン（麥迪遜）の属するウィスコンシン（威斯康星）州は畜産と乳製品で有名）

學會年華逢廿六
麥屯相聚慶春秋
今朝共飲威州奶
來歲同嘗神戸牛

国内学会消息（平成30年）

◉北海道中國哲學會

例會　４月27日

・一般市民向けの漢文教育　和田　敬典

５月25日

・『穀梁傳』の「正」について―廖平説による再検討―　吉田　勉

６月29日

・邢昺『論語注疏』の世界　弛　和順

７月27日

・《毛詩注疏》版本漫談　孔　祥軍

９月21日

・卒業論文構想發表會　上林　千浩

11月16日

・修士論文構想發表會　屈　芸婷

12月７日

・類書と年號字勘進と―金澤文庫本『群書治要』移點の意味―(續攷)　近藤　浩之・石井　行雄・猪野　毅

○第48回大會「日中の思想と文化」總合學術會議（北海道中國哲學會・科研基盤Ｂ「年號勘文資料の研究基盤の構築」關聯會議）　10月20、21日

・『萬葉集』の校勘と清朝小學の關係について―木村正辭『萬葉集訓義辨證』を中心に　（雲林科技大學）金原　泰介

・段玉裁の經學の特質について　（上海師範大學）石　立善

・江戸の國學者と清朝考證學―平田篤胤を中心に　廖　海華

・熊澤蕃山の『論語』解釋について　關　雅泉

・廖平の『穀梁傳』解釋―その今學説と古義の探究―　吉田　勉

・朝聞夕死と存順沒寧と（苫小牧工業高専）山際　明利

・類書と年號字勘進と　石井　行雄・近藤　浩之

・年號と時間の回歸性　（中央大學）尾形　弘紀

・年號の背景　（大正大學）清水　浩子

・國立歴史民俗博物館所藏田中穰氏舊藏典籍古文書『元秘抄』簡介　髙田　宗平

・中國出土資料に見える紀年について　名和　敏光

・廣橋兼綱「年號勘者例」とその紙背文書―法勝寺惠鎮とその周邊―　（愛知學院大學）福島　金治

・難陳の議論の變遷から見えるもの　水上　雅晴

・近世民衆の年號受容　（京都府立丹後郷土資料館）吉野　健一

（和田　敬典　記）

◉北海道大學中國語・中國文學談話會

第258回　７月21日

・中國での日本語教員研修を擔當して思ったこと―言語の習得から文化研究への格闘　張　偉雄

○刊行物

『饕餮』第26號（９月）

『火輪』第39號（３月）

『連環畫研究』第７號（３月）

（藤井　得弘　記）

◉秋田中国学会

春季第166回例会　５月19日　於秋田大学教育文化学部

・「湖南小稿」其の二　佐藤　章和

・梅娘と『婦女雑誌』　羽田　朝子

秋季第167回例会　12月１日　於秋田大学教育文化学部

・中国の「語文」（国語）教育と「古代漢語」（漢文）の教材　杉田　泰史

・北燕政治史論　内田　昌功

（羽田　朝子　記）

◉東北中国学会

第67回大会　5月26日、27日　於東北大学

第一日

・傾斜考―ナナメとその情景　塚本　信也

［公開講演］

対談「いま」を語る　吉田　公平・中嶋　隆藏

第二日（中国思想・中国文学研究分野のみ抜粋）

・劉向の災異説の一面　南部　英彦

・後漢末思想家の儒法思想の意味　渡部東一郎

・孟郊詩の「幽」について　陳　俐君

・温庭筠の望郷詩について　鈴木　政光

・陸九淵の政治上の立場とその心学思想との関連について　福谷　彬

・明代の社会的価値観上における「三言」女性像の位置づけ―男尊女卑下における女性像の可視化に関する試論　衣　梅君

（齋藤　智寛　記）

◉東北シナ学会（中国哲学・中国文学分野のみ抜粋）

二月例会　2月20日［卒業論文・修士論文発表会］

・白居易詩文における科挙　工藤龍太朗

・魯迅『現代日本小説集』研究　田村　大輔

四月例会　4月21日［新入生歓迎会・講演］

・熟成する七律―揺らぐ器に盛る「言い難き」もの―　佐竹　保子

（尾﨑順一郎・菅原　尚樹　記）

◉東北大学中国哲学読書会

第189回　3月23日

［修士論文構想発表会］

・反駁から見る馮道論の相違について　川端　柾輝

・船山の封建・郡県論の論点所在　宗　延聡

［博士論文構想発表会］

・黄宗羲の思想と『明儒学案』―「諸儒学案」に着目して　豊島ゆう子

第190回　8月3日［講演会］

・中村惕斎対《詩経》「興」体的闡釈―以《筆記詩集伝》為中心　史　甄陶

第191回　8月24日［研究発表会］

・簡折〝敬〟論視域下二程子工夫論的思想異同　趙　正泰

第192回　9月28日［修士論文構想発表会］

・宋代における馮道論の推移　川端　柾輝

・李卓吾思想研究　相原　貴次

・王船山の封建論　宗　延聡

第193回　11月2日［卒業論文構想発表会］

・『韓非子』の政治思想　石垣　沙知

・王充の死生観　藤本　隆司

第194回　11月2日［研究発表会］

・先秦道法思想研究　路　高学

第195回　12月21日［研究発表会］

・『明儒学案』「東林学案」について―溝口雄三氏の研究を手がかりに　豊島ゆう子

・清初における朱子学関連書の編纂・出版について―呂留良の取り組みを中心に　尾﨑順一郎

（尾﨑順一郎　記）

◉東北大学中国文学談話会

第1回　4月3日［卒業論文雑誌会］

・魏文哲氏「論兪万春的『蕩寇志』」について　大石　銀河

・相原里美氏「延安解放区における作家の苦悶―丁玲『夜』を中心に」について　雪山　美希

第2回　7月30日［卒業論文構想発表会］

・丁玲「霞村にいた時」にて、登場人物に与えられた機能に関する考察　雪山　美希

第3回　8月2日［卒業論文構想発表会］

・『蕩寇志』の形成考察　大石　銀河

第4回　11月5日［卒業論文中間発表会］

・『蕩寇志』の形成考察―『水滸伝』との関連性を中心に　大石　銀河

第５回　11月12日［卒業論文中間発表会］

・丁玲『霞村にいた時』論考　雪山　美希

（菅原　尚樹　記）

◉筑波中国学会

例会　７月19日

・阮籍五言「詠懐詩」の構造―構造分類の試み　村越　充朗

10月11日

・『聊斎志異』における冥界　倉持　怜

10月18日

・阮籍五言「詠懐詩」における他者の存在　村越　充朗

12月６日

・劉禹錫の六朝詩人への意識　荒川　悠

○刊行物

『筑波中国文化論叢』第37号（10月）

（稀代麻也子　記）

◉中国文化学会

大会　６月30日　於山形大学

・余嘉錫『世説新語箋疏』小考―目録学を中心に―　藤澤　慎司

・中井履軒『論語逢原』にみえる仁概念―「専言之仁」「偏言之仁」の構造―　佐藤　秀俊

・芥川文学の魯迅訳―「羅生門」と「鼻」をめぐって　王　唯斯

・翻訳家としての王国維―清末における異文化摂取の一側面―　小島　明子

・杜牧撰『注孫子』と杜佑撰『通典』について　高橋　未来

・「赭白馬賦」と「雑説」　谷口　匡

・陸徳明は『経典釈文』になぜ『老子』『荘子』を撰集したか　高橋　均

［講演］

・飛鳥と降り立った「真意」―陶淵明「飲酒」詩の寓意　沼口　勝

（司会）大上　正美

例会　於大妻女子大学

３月10日

・日治初期台湾の初等漢文教育一斑―書房と公学校　樋口　靖

９月15日

・蘇曼殊の自己演出　荒井　礼

12月15日

・白居易の劉禹錫への評価　荒川　悠

（内山　直樹　記）

◉お茶の水女子大学中国文学会

大会　４月21日

・敦煌資料にみる唐代の婚礼の俗習―「下女夫詞」を中心に　伊藤美重子

・物語現在における時間の展開―日本語と中国語を中心に　橋本　陽介

７月例会　７月７日

・清代北京語の研究資料について　陳　暁

・東南アジア華人と「文化」について　新沼　雅代

９月例会　９月１日

・沈約の「郊」について　董　子華

・金末モンゴル王朝期の文学のあり方について―耶律楚材と元好問の作品を中心に　白　蓮杰

・戯単資料からみる天津の遊芸場　鈴木　直子

12月例会　12月８日

・“帮”を用いた文のポライトネス性について　永江　貴子

・中国語学習者の習得状況に関わる要因の探索　安藤　好恵

（竹野　洋子　記）

◉六朝学術学会

第22回大会　６月16日　於二松學舍大学

・『老子』における「言」と「道」の関係性　初海　正明

・前四史に見る夷狄列伝の展開　三津間弘彦

・許懋の「封禅停止に関する建議」について　洲脇　武志

・李賀の詩にあらわれる庾肩吾―「皇子」に唱和する詩人としての自己意識―　遠藤　星希

・東晋中期の政局における皇太后の役割　小池　直子
・芳る祖国―陸機「悲哉行」の芳香表現をめぐって　狩野　雄
・晩唐の駢文の六朝文化との関わりについて　加固理一郎
・劉孝標と劉勰との関係について　榎本あゆち

第36回研究例会 3月17日　於香川大学

・江淹の「恨賦」について　西川　ゆみ
・王弼の言語思想　和久　希
・李徳林とその「覇朝雑集序」について　土屋　聡

第37回研究例会 12月2日　於青山学院大学

・後漢の相見儀制―「敬」の方式を中心に　青木　竜一
・郭象の「自然」―行為という視点から―　山下紀伊子
・沈約の「郊」―「遊」と「居」をめぐって　董　子華
・かなしいうた―「歌以詠之」「歌以言志」の意味するもの　牧角　悦子

○刊行物

『六朝学術学会報』第19集（3月）

（山崎　藍　記）

◉日本杜甫学会

第2回大会　10月5日　於早稲田大学

・薛濤と杜甫―時を異にして成都の浣花渓に居住した二人の詩から―　横田むつみ
・清 顧宸『辟疆園杜詩註解』について　大橋　賢一

［シンポジウム］再読『李白と杜甫』

・杜甫的“獨善”―兼論其對仙境、仙道的憧憬―　下定　雅弘
・閬州隷属之変与杜甫閬州之行　張　思茗

○刊行物

『杜甫研究年報』創刊号（3月）

（紺野　達也　記）

◉中唐文学会

大会　10月5日　於早稲田大学小野記念講堂

・晩唐杜荀鶴の戦乱を詠じた詩について　鳴海　雅哉
・杜甫の「鷹、鶻、鵰」のイメージを考える　谷口真由実

［シンポジウム］

・目加田誠先生―その人と文学　田口　暢穂・中村　民雄
（コーディネーター）高芝　麻子

○刊行物

『中唐文学会報』第25号（10月）

（紺野　達也　記）

◉日本宋代文学学会

第五回大会　5月26日　於慶應義塾大学日吉キャンパス

・対句表現に見る慶暦期後半の梅堯臣詩について　大井　さき
・西尾市岩瀬文庫蔵五山版『山谷詩集注』における書き入れについて―黄山谷詩漢文抄との関わりから―　大島絵莉香
・南宋詞における「汴京」をめぐって　余　佳韻
・甲子與節序：論遺民詞人劉辰翁入元後的心境轉折　余　筠珺
・論辛棄疾詞的現實空間敍述　汪　超
・『楽府雅詞』拾遺初探　藤原　祐子
・喬大壯手批《清眞詞》析論　卓　清芬

第2回「東アジア交流と文学」国際シンポジウム〈第一部〉詞学研究の現状と展望（九大 QR プログラム共催）

パネラー：保苅　佳昭、譚　新紅、卓　清芬
司　会：内山　精也

〈第二部〉唐宋八大家の諸相― 欧陽脩と王安石―（九大 QR プログラム、JSPS 基盤（B）「唐宋八大家散文の特色とその受容に関する総合的研究」共催）

・歐陽脩の詞集 吉州本『近体楽府』について　東　英寿
・“修廟”與“立學”：北宋學記類文章的一個話題―從王安石《繁昌縣學記》入手　朱　剛

司会：副島　一郎

（浅見　洋二　記）

◉日本聞一多学会

大会　７月28日　於二松學舍大学

・「屈原否定論の系譜」再考　吉井　涼子
・聞一多と日本―目加田誠「聞一多評伝」をめぐって―　鄧　捷
・朱自清の『詩言志辨』について―近代学術と経学の融合―　牧角　悦子

○刊行物

『神話と詩』第16号（３月）

（横打　理奈　記）

◉日本漢詩文学会

https://nihonkanshibun.jimdo.com/

第11回例会　３月３日　於共立女子大学

・ピアノ弾奏　H・マンシーニ曲、香焼志保編曲「ムーン・リヴァー」（映画「ティファニーで朝食を」より）　香焼　志保
・曹丕『典論』研究―「交」について　永田　諒乃
・『三字経』について　中村　昌彦
・台湾における「文化台独」をめぐる議論―高校古典教材をめぐって　川田　健
・修辞的に読む　古代ギリシアの場合　上野　愼也
・李白「早に白帝城を発す」の謎（前編）　宇野　直人

第12回例会　９月２日　於如水会館

・ギター弾奏　フランツ・シューベルト作曲「セレナーデ」（ギター編曲版）ほか　田中　守久
・歌舞伎「連獅子」における中国の文化　古瀬明日香
・曹丕『典論』執筆に関する一考察　永田　諒乃
・李白「早に白帝城を発す」の謎（後編）　宇野　直人
・跳躍する鞦韆：唐詩に於ける「鞦韆」モチーフについて　ガイ・ホッブス
・フランスにおける日本文化受容の一端　増野　弘幸
・漢和字典を創る　中林　良弘

○刊行物

・『日本漢詩文学会会報』第５号（７月）

（松野　敏之　記）

◉日本詞曲學會

詞籍「提要」譯注檢討會

９月１日、２日　於中京大學文化科学研究所

『四庫全書總目提要』「詞曲類」の譯注および檢討

『唐宋名家詞選』譯注檢討會

３月10日、11日　於日本大學商學部

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

小風絮會（『唐宋名家詞選』譯注）

２月12日、４月29日、６月２日、７月28日、９月22日、11月４日、12月２日　於立命館大學文學部

龍榆生編『唐宋名家詞選』の譯注および檢討

○刊行物

『風絮』別冊

龍榆生編選『唐宋名家詞選』北宋編（二）（３月）

『風絮』第15號（12月）

（藤原　祐子　記）

◉國學院大學中國學會

第214回例会　１月６日

・胡仔『孔子編年』について　青木　洋司
・『巫系文學論』管窺―文学の発想様式について　石本　道明

第215回例会　10月13日

・『韓詩外傳』の『詩經』解釈について―礼に関する言及を手がかりに―　河野　貴彦
・『典論』「論文」の創作時期および動機について　趙　歓
・陶淵明における生と死について―「形影神」三首を中心に―　戍法師　聖
・蘇軾「論武王」について―「孔氏之家法」を中心に―　岩本　優一

第61回大会 ６月16日、17日

［公開講演］

・朱熹の跋文における「感情」の表象　市來津由彦

［研究発表］

・「能爲楚聲」に関する一考察　早田ひかり

・後漢趙壹の賦小考　宮内　克浩
・唐判の変容と宋四六の成立―『用成語』を中心として―　陶　熠
・奥野信太郎所蔵戯単について　波多野眞矢
・謝冰心と台湾の関係について　牧野　格子

研究会

漢代文学研究会（毎週月曜日）―『漢紀』を読む―　宮内　克浩
唐代文学研究会（毎週火曜日）―唐詩を読む―　赤井　益久・川合　康三
宋代文学研究会（毎週月曜日）―『蘇軾全集校注』を読む―　石本　道明
中国礼俗文化研究会（毎週金曜日）―『開通冥路科儀』を読む―　浅野　春二
中国現代文学研究会（毎週金曜日）―謝冰心作品を読む―　牧野　格子

○刊行物

學會誌『國學院大學中國學會報』第64輯
機關誌『崑崙』第220号～第222号

（青木　洋司　記）

◉国士舘大学漢学会

第53回大会　12月21日

［留学生帰朝報告］
・北京師範大学留学一年の成果　渡邊　展人
［中国短期研修報告］
・北京工業大学研修　川崎　純・武部　水音
［大学間交流セミナー報告］
・蘇州大学研修　橋本　隆也・三島　忠祐・山下　結菜
［卒業論文発表］
・周敦頤「太極図」研究　西村　塁
・『史記』老荘列伝について　西村　晋平
［研究発表］
・高田陶軒先生「服部随軒先生墓碑銘」を巡って―続「漢学専攻」創設時の碩学たち―　菊池　誠一
［特別講演］
・書道のこころ　土屋　明美
［第７回詩文朗読コンテスト］
・課題文：郭沫若「天上的市街」

○刊行物

・『國士舘大學漢學紀要』第20号

（鷲野　正明　記）

◉早稲田大学東洋哲学会

第35回大会　６月９日

・李陽冰の文字解釈―『説文解字繫傳』祛妄篇にみる　関　俊史
・荀悦の人間観　長谷川隆一
・聖冏、聖聡における体用関係の形成について　佐伯　憲洋
・『シュローカヴァールティカ』普遍章に見られる他学派説　野武美彌子
・孫思邈の医学思想―道教思想の脈絡において―　舘野　正美
［講演］
・『般若心経』とアヴァローキテーシュヴァラ（観[世]音／観[世]自在）　（国際仏教学大学院大学）齋藤　明

○刊行物

『東洋の思想と宗教』第35号（３月）

（櫻井　唯　記）

◉早稲田大学中国文学会

第42回春季大会　2017年６月17日

・『戦国縦横家書』の編纂について―文字の使用を中心として―　王　曹傑
・時間表現から見た原采蘋の詩　柯　明
・プレイリスト文化から見る音楽メディアとコミュニケーションの融合　楊　駿驍
［講演会］
・『陳独秀文集』全三巻（東洋文庫）翻訳で見えてきたこと　長堀　祐造

第42回秋季大会　2017年11月25日

・子どもの特徴に合った第二言語教授法の研究―「文字」を頼らない単語学習から―　若林ゆりん

・中国における児童読書の現状と意識変化　陸　賽君
・清末科学小説における「超級英雄（スーパーヒーロー）」―『電世界』「電学大王」を中心に　段　書暁

［講演会］
・十三世紀中国の詩壇に起きたこと―中国近世詩学再構築の試み　内山　精也

第43回春季大会　2018年６月23日
・日中比較から見る中国キャラクター文化初探―「二次元」を中心に　劉　茜
・明代の通俗字書『海篇集韻大全』の音注について　高山　亮太
・昌平黌における詞籍の受容について　陳　竺慧

［講演会］
・一架の題額、一基の石碑の物語るもの―杭州西湖と江戸時代の日本文化　鈴木　陽一

第43回秋季大会　2018年12月８日
・広東語の単音節語について　塩田　祥大
・許鞍華の映画にみる香港返還と「香港人」―『天水圍的日與夜』、『天水圍的夜與霧』を中心に　張　宇博
・清朝における「唐太宗征西」故事の流伝―宮廷演劇『西唐伝』と北方俗曲　柴崎公美子

［講演会］
・字音の変遷―最終講義にかえて　古屋　昭弘

○刊行物
『中国文学研究』第43期（2017年12月）
『中国文学研究』第44期（2018年12月）

（中村　優花　記）

◉名古屋大学中国哲学研究会

第91回研究会　６月11日［卒業論文構想発表］
・『淮南子』について　安立　哲人

第92回研究会　７月９日［卒業論文構想発表］
・『韓非子』について　杉浦　可奈
・『論語』の古注と新注の解釈の違い　三嶋　貴音

第93回研究会　９月３日［研究発表］
・陳元贇『老子経通考』に見られる「実理」についての一考察　李　麗

第94回研究会　９月25日［卒業論文中間発表］
・『淮南子』の宇宙論　安立　哲人
・朱元育『悟真篇闡幽』における「元神」について　藤野　光雄

第95回研究会　10月29日［卒業論文中間発表］
・『韓非子』における「利」について　杉浦　可奈
・『論語』解釈の比較　三嶋　貴音

○刊行物
『名古屋大学中国哲学論集』第17号（神塚淑子教授退休記念号）（５月）

（石丸　羽菜　記）

◉京都大学中国文学会

第33回例会　７月28日　於京都大学文学研究科第３講義室
・江戸時代における中国白話文学の読まれ方―『西廂記』を例に―　楊　維公
・近代中国における「自然人」の系譜について―沈従文の「野」叙述を入り口として　津守　陽
・杜甫における「独善」―その仙境と仙道への憧憬について―　下定　雅弘

講演会　12月10日　於京都大学時計台会議室Ⅲ
・読《春江花月夜》　（南京大学）張　伯偉

○刊行物
『中国文学報』第90冊（４月）
『中国文学報』第91冊（10月）

（緑川　英樹　記）

◉中國藝文研究會

合評會及び研究會　於立命館大学
３月３日
・尾張明倫堂刊本『唐丞相曲江張先生文集』について　富　嘉吟
・法學家的情感困境―從董康《書舶庸譚》中的一段苦澀戀情説起　楊　月英
・詞牌「鵲橋仙」について　萩原　正樹

6月23日

・官版『又玄集』とその周辺　富　嘉吟

・中日抒情美学比較研究―唐宋令詞の情景交融と平安短歌の物の哀―　詹　斐雯

・善妙考　谷口　義介

・黄周星傳記綜考　唐　元

・從樂章到詞壇―清初朝野間的詞學互動，兼論《詞律》成書的現實契機　李　日康

8月11日

・日本新見三種《類編草堂詩餘》考　王　睿

・小泉盗泉とその詞について　萩原　正樹

○刊行物

『學林』第66號（5月）

『學林』第67號（11月）

（田中　京　記）

◉東山之會

研究發表　於京都女子大學

2月24日

・江戸期における『蒙求』受容の一側面と出版状況―標題「落下歴數」の徐子光注に対する岡白駒の箋注・佐々木向陽の標疏に着目して―　桐島　薫子

3月24日

・年誌書寫―論劉克莊「自壽詞」的自我形象―　佘　筠珺

4月28日

・寂嚴和上漢詩集『松石餘稿』の出版に加わって／「首届詩聖杜甫與中華詩學國際學術研討會」に参加して　下定　雅弘

6月23日

・韓愈詩歌的畫工與化工及其影響　王　叡

7月28日

・佐賀県有田町山田神社境内の石刻漢文悉皆調査　野田　雄史

9月22日

・『詩學大成抄』をめぐって　松尾　肇子

11月24日　東山之會・國立政治大学華人文化主體性研究中心共催中國文學座談會

・日中學者論中國詩人的美感意識―淺談日中美感意識之差異―　愛甲　弘志

・美感與道德之間―以張亨對於《論語》的詩論爲核心―　林　啓屏

・日本學者對中國古典詩聲音美感的領悟―以松浦友久的解讀爲例―　加藤　聰

・詩人肇出―屈原主體意識的建構―　廖　棟樑

・“朧月”之遡源―對於悲哀情調之共鳴―　中木　愛

・徐復觀先生中國“抒情詩”　曾　守正

・結婚之歌　淺見　洋二

・閱讀革命―晚明竟陵派的杜甫詩歌美學―　陳　英傑

11月24日

・『日本靈異記』における儒学典故について―「孟嘗之七善」の考察を中心に―　劉　九令

12月15日

・晚明清初渡日華僧高泉性激『釋門孝傳』初探　劉　家幸

『長江集』譯註（2月24日至12月15日）

卷三「洛中道中寄弟」至卷四「宿贇上人房」

（愛甲　弘志　記）

◉阪神中哲談話会

第403回例会　11月24日　於やまと会議室（奈良市）

第一部「阪哲評書」　全体司会　鈴木　達明

・『漢書注釈書研究』
著者：洲脇　武志／評者：秋山陽一郎

・『南北朝時代の士大夫と社会』
著者：池田　恭哉／評者：田中　一輝

・『中国古代史研究の最前線』
著者：佐藤　信弥／評者：渡邉　英幸

第二部「研究発表」

・漢代における「春秋家」の範疇について　内山　直樹

第三部「特別講演」

・学術出版の未来　（星海社エディター）平林　緑萌

（橋本　昭典　記）

◉大阪大学中国学会

http://www.let.osaka-u.ac.jp/chutetsu/xuehui/index.htm

講演会　７月８日　大阪大学豊中総合学館

古代中国の占術と観相学（公益社団法人日本易学連合会との共催）

・古代中国の占術　湯浅　邦弘

○刊行物

『中国研究集刊』第64号〔珍号〕（６月）

（湯浅　邦弘　記）

◉懐徳堂研究会

http://www.let.osaka-u.ac.jp/~kaitoku-s/index.html

第28回研究会　12月９日　大阪大学文学部中庭会議室

・中井竹山と龍野藩の儒者と　藤居　岳人

・西村天囚の学問と『論語』研究と　矢羽野隆男

・西村天囚の懐徳堂研究とその草稿―種子島西村家所蔵西村天囚関係資料調査より―　竹田　健二

○刊行物

『懐徳堂研究』第２集（11月）

（湯浅　邦弘　記）

◉中国出土文献研究会

http://www.shutudo.org/

第68回研究会　講演会「新出土文献による中国学の展開」

２月10 日　大阪大学文学部中庭会議室

・再談《性自命出（性情論）》篇「室性者故也」句的釋讀問題　郭　永秉

・清華簡『管仲』と伝世『管子』との対比研究―各段の主題語を中心に―　曹　方向

・清華簡の復元・保存と使用　肖　芸曉

第69回研究会　スコットクック（顧史考）先生講演会

４月28日　大阪大学文学部ミーティングルーム

・上博二〈子羔〉〈魯邦大旱〉兩篇之整理與對讀

スコット・クック（顧史考）

国際学術交流

３月26日

湯浅邦弘・福田哲之・竹田健二・中村未来・白雨田（通訳）が安徽大学蔵戦国竹簡の実見調査および徐在国教授との会談を行った。また、湯浅が大学院生向けの講座を行った。

・日本における出土文献研究の現状と課題　湯浅　邦弘

９月14日、15日

国際学会「楚文化与長江中游早期開発国際学術研討会」（武漢大学主催）に参加。

・清華簡《管仲》的政治思想　湯浅　邦弘

・《越公其事》的竹簡排列和 “劃痕”　竹田　健二

・上博九所述春秋楚史例析　曹　方向

10月20日、21日

国際学会「早期中国的書写：在文本内外」（北京語言大学漢学研究所主催）に参加。

・清華大學藏戰國竹簡（壹―柒）的字迹與形制―隨葬書籍的類別與對其體系性理解―　福田　哲之

・左契口再考―契口と劃痕―　竹田　健二

12月６日

暨南大学（広東省広州）で開催された国際シンポジウム「中日古代兵学：思想・歴史・文学の総合的アプローチ」で特別講演。

・銀雀山漢墓竹簡「論政論兵之類」考釈　湯浅　邦弘

（湯浅　邦弘　記）

◉中国四国地区中国学会

第64回大会　６月２日　於高知県立大学文化学部

・「鬼交」の変遷とその起源　孫　瑾

・『新編酔翁談録』考―「談録」を中心として　孟　夏

・兼意の一連の抄に見える『修文殿御覧』引用の痕跡　藤田　衛

・木下朱子学を読む　溝本　章治

・『西廂記』と酒令―「西廂記酒令」を中心に　樊　可人

・1920、30年代における岩波書店の出版活動と中国　許　丹青

（玉木　尚之　記）

◉広島大学中国思想文化学研究室研究会

第202回研究会　２月８日［卒業論文発表会］

・緯書における感生帝説　大竹晋太郎

・『日本書紀』出典研究―潤色に利用された「類書」考―　吉岡　祐馬

第203回研究会　11月15日

［卒業論文中間発表会］

・王充の鬼神論とその形成　山内　純季

［修士論文中間発表会］

・『荀子』思想における「聖人」　水　源

・中村正直の昌平黌時代の実学思想　森　泰平

第204回研究会　12月13日［卒業論文テーマ発表会］

・阮籍の玄学思想―『通老論』『達荘論』から―　藤田　奨己

・京都遊学中の中山城山の著作物と思想について―『校正天文訓』を中心に―　矢野　愛子

○刊行物（発行人：東洋古典學研究會）

『東洋古典學研究』第45集（５月）

『東洋古典學研究』第46集（10月）

（有馬　卓也　記）

◉広島大学中国文学研究室研究会

第206回　１月29日［修士論文最終発表会］

・梁川紅蘭の詩学の素養について　銭　心怡

第207回　２月９日

［卒業論文最終発表会］

・「白蛇伝」の人物像―青青像を中心に―　大西　紀衣

・『西遊記』の翻訳、改訳について―『通俗西遊記』『絵本西遊記』を中心に―　道下　京

［卒業論文構想発表会］

・『紅楼夢』の呼称に関する研究―四種の訳本との比較を中心に―　范　詩画

第208回　５月28日［学会事前発表会］

・『新編酔翁談録』考―「談録」を中心として―　孟　夏

第209回　６月26日

［修士論文中間発表会］

・謝朓詩研究―詠物詩を中心に―　劉　雅婧

・詩語としての宋清のイメージ―柳宗元「宋清伝」の受容をめぐって―　許　培俊

・『新編分類夷堅志』における科挙の物語　施　金暁

・『杜詩抄』における中国注釈書について―『読杜詩愚得』を中心に―　高橋　武

［修士論文構想発表会］

・明清文学における奴婢像―『醒世恒言』を中心に―　大西　紀衣

第210回　７月23日［卒業論文構想発表会］

・中国における日本刀を詠んだ詩について　松田　悠希

・『太平広記』に見られる「屍」像について　清水　優一

・『笑府』における人物描写―職業および属性を中心として―　室上　大樹

・大正天皇における日本漢詩の色彩表現について　中田　彩香

第211回　11月26日［卒業論文中間発表会］

・北宋「日本刀歌」の作者について―先行研究の整理と補充―　松田　悠希

・『太平広記』に見られる「屍」像について―外見描写を中心として―　清水　優一

・『笑府』における人物描写―僧侶について―　室上　大樹

第212回　12月21日

［修士論文中間発表会］

・清莫友芝『唐写本説文解字木部箋異』の訳注　鶴原　勝

・「蝜蝂伝」の受容について　許　培俊

・『新編分類夷堅志』と善書　施　金暁

・「白蛇伝」物語における多様性―地方劇、曲芸を中心として―　大西　紀衣

［修士論文構想発表会］

・『本朝文粋』所収の「賦」の基礎的研究―唐代詩賦との比較を通して―　鄭　然

・『聊斎志異』研究―商人像を中心として―　劉　易曼

○刊行物

・『中国学研究論集』第36号（４月）

（川島　優子　記）

◉中国中世文学会

平成30年度研究大会　10月27日　於広島大学東千田キャンパス

・六朝詩に見る「ふね」について　佐伯　雅宣

・『三国志演義』中の三国時代の詩文について　武井　満幹

・『紅楼夢』の描写に見られるある種の多義性について—花の対応問題を端緒として—　森中　美樹

・清代詩会における六朝詩の遊び　市瀬　信子

・日本近世史料に見られる梁啓超像をめぐって　張　淑君

・遠山荷塘の著作意識—新資料を手がかりとして—　樊　可人

例会　於広島大学文学研究科

1月11日

・『西廂記』と酒令—「西廂記酒令」を中心に—　樊　可人

・『新編酔翁談録』の成立背景について　孟　夏

1月18日

・梁川紅蘭の詩学の素養について　銭　心怡

5月10日

・対句表現に見る慶暦期後半の梅堯臣詩　大井　さき

・『新編酔翁談録』考—書名、編者名を手がかりとして—　孟　夏

・『西廂記』と酒令—「西廂記酒令」を中心に—　樊　可人

6月14日

・謝朓詩研究—謝朓の同詠詩を中心に—　劉　雅婧

・詩における「宋清伝」の受容について　許　培俊

・明清文学における奴婢像—『醒世恒言』を中心に—　大西　紀衣

12月13日

・『新編分類夷堅志』と善書　施　金暁

・「蝓蝂伝」の受容について　許　培俊

・雪嶺永瑾『杜詩抄』の研究—歌行詩を中心に—　高橋　武

○刊行物

『中国中世文学研究』第71号（３月）

（川島　優子　記）

◉山口中国学会

例会　６月30日　於山口大学人文学部

・刺繍にかかった時間を財産として「貯金」する苗族女性—中国貴州省黔東南雷山県西江鎮羊排寨を調査地として　楊　梅竹

大会　12月22日　於山口大学人文学部

・苗族社会におけるゴウヒャンヒャンへの一考察—中国貴州省黔東南州施洞鎮を事例として　曹　紅宇

・陸貽典における『琵琶記』校勘　張　洋

（根ヶ山　徹　記）

◉九州中国学会

第66回大会　５月13日　於福岡大学

・『劉子節要』における誠意説の位置づけについて　宮尾　祥平

・佐久間象山の文人意識—彼の琴学をめぐって　韓　淑婷

・伊尹と易牙—「味を知る者」の明暗　横山　慎悟

・法家思想からみた「道は法を生ず」の理論構造について—『馬王堆漢墓帛書老子乙本巻前古佚書』を中心にして—　横山　裕

・中国文学における蘇小小イメージの伝播　彭　臘梅

・中国語圏の映画字幕における訳出の情報量について　種村　理恵

・福岡大学における中国語教育の現状　荒木　雪葉・宮下　尚子

・『三言二拍』における対称詞の用法について　劉　驫

・《醒世姻縁伝》における語彙分類と問題点について―動詞の分類を中心に―　木村　裕章
・《醒世姻縁伝》の成書は明代か清代か　植田　均
・一九三〇年代日本人学者の京劇観―濱一衛の京劇俳優評を中心に　李　莉薇
・成簣堂文庫所蔵の孤本『西廂記』考　黄　冬柏
・班固「幽通賦」の曹大家注が持つ学術性について　栗山　雅央
・平安嵯峨帝の「王昭君」詩と藤原佐世『日本国見在書目録』　竹村　則行
・日本の魯迅、中国の魯迅　山田　敬三

〇刊行物

『九州中国学会報』第56巻（５月）

（山田　俊　記）

◉九州大学中国文学会

第297回中国文藝座談会　１月27日

・司馬相如「大人賦」について　木村　淳美
・「目連変文」の文体研究　下川　純奈
・『水滸伝』の人物像研究　鶴田　茜
・白蛇伝物語の諸相　諏訪田実紀
・程小青とコナン・ドイル―シャーロック・ホームズ翻訳研究　木佐木映見
・日本内閣文庫所蔵の『極玄集』について　汪　涵

第298回中国文藝座談会　３月３日

・武定侯郭勛と通俗白話歴史小説　井口　千雪
・黄庭堅と蘇軾「和陶詩」　原田　愛
・「長恨歌」と中唐の「尤物」論　竹村　則行

第299回中国文藝座談会　４月28日

・白居易の描いた悲劇の王妃たち　干　佳林
・日本白居易研究における「四傑」―平岡武夫・花房英樹・太田次男・岡村繁―　李　宝霖
・周作人の「草木虫魚」シリーズ（前篇）―鳥獣虫魚小品―　呉　紅華
・『西廂記』評点本について　黄　冬柏

第300回中国文藝座談会　７月14日

・『李嶠百詠』と初唐における詠物詩の変革　胡　凌燕
・荻生徂徠における王世貞の文学思想の受容　薛　欣欣
・『四庫全書総目』の殿本と浙本の比較―「史部」を中心として　楊　柳
・死と向き合う陸機―「歎逝賦」と「挽歌詩」を中心として　王　昊聰
・三百回を通過した中国文藝座談会　竹村　則行

九大伊都 CP 完成記念人文科学研究院国際シンポジウム「アジアにおける人の移動と人文学的変容」SECTION Ⅱ「移ろえど変わらぬ和漢古典の魅力」　９月21日

・『聯珠詩格』と江戸漢詩の大衆化　揖斐　高
・論建安文学批評的発生　（北京大学）傅　剛
・唐代「格」「律」「体」及相関詩学概念講考釈　（北京大学）杜　暁勤
・日中で異なる「長恨歌」の本文　静永　健
・空海の漢詩文を通じて平安朝の「境界」を読み直す　（四川大学）ウイリアム・マツダ
・東アジア勧善書の移動と庶民教育　（東明大学校）成　海俊
・嵯峨本再考　（国文学研究資料館）入口　敦志
・文求堂田中父子的漢籍集蔵与鑑識　（北京大学）劉　玉才
・経書註釈と博物学の間―江戸時代における『詩経図』について　陳　捷

第301回中国文藝座談会　11月17日

・馮夢龍の笑話集編纂について　山口　綾子
・西晋における「雷電」と陸機　王　昊聰
・妻を暗示する唐詩について　静永　健

〇刊行物

『中国文学論集』第47号（12月）

（井口　千雪　記）

令和元(平成31)・2年度各種委員会の構成

◎：委員長　○：副委員長　◆：幹事

大会委員会

◎赤井　益久　○吾妻　重二　市瀬　信子
坂井多穂子　谷口真由実　種村　和史
土谷　彰男　東　英寿　◆鈴木　崇義

論文審査委員会

◎渡邉　義浩　○浅見　洋二　○中島　隆博
井川　義次　伊東　貴之　上田　望
大西　克也　稀代麻也子　近藤　浩之
末永　高康　高山　大毅　竹越　孝
武田　雅哉　谷口　洋　中里見　敬
濱田　麻矢　堀川　貴司　町　泉寿郎
松江　崇　横手　裕　◆伊藤　涼

出版委員会

◎静永　健　○宇佐美文理　門脇　廣文
齋藤　希史　佐々木勲人　三浦　秀一
渡邉　義浩　◆佐藤　浩一

選挙管理委員会

◎松原　朗　○松尾　肇子　恩田　裕正
河野貴美子　高橋　幸吉　陳　捷
吉田　篤志　◆松野　敏之

研究推進・国際交流委員会

◎垣内　景子　○小川　恒男　内山　精也
野村　鮎子　◆阿部　光麿

広報委員会

◎大木　康　○木津　祐子　閻　淑珍
鶴成　久章　山下　一夫　◆笠見　弥生

将来計画特別委員会

◎佐竹　保子　○弛　和順　長尾　直茂
萩原　正樹　早坂　俊廣　柳川　順子
◆髙戸　聰

委員会報告

【論文審査委員会】　委員長　大木　康

〇学会報第71集応募論文の審査の経緯

2019年１月15日（消印有効）締め切りの応募論文は全31篇（哲学・思想部門５篇、文学・語学部門19篇、日本漢学部門７篇）であった。１月26日に論文審査委員会を開催し、論文１篇 につき３名の査読委員（論文審査委員会委員１名を含む）を決めた。

３月30日開催の論文審査委員会で、査読委員３名の査読結果をもとに、哲学・思想部門２篇、文学・語学部門６篇、日本漢学部門２篇の計10篇の掲載を決めた。

今回、枚数超過と認められた論文は皆無であった。来年以降も引き続き、「執筆要領」の遵守にご注意いただければ幸いである。

投稿論文は、本来16篇の掲載が可能である。ところが、昨年は14篇、今回に至っては、わずか10篇しか採用できなかったことはきわめて残念であった。来年は、さらに多くの会員の積極的な投稿を期待したいと思う。

〇その他、３月30日の論文審査委員会での審議決定事項

・学会報第72集依頼論文執筆候補者（評議員２名、一般会員２名）を決定し、理事会に推薦することとした。
・哲学・思想部門から２名、文学・語学部門から１名の学会賞候補者を決定し、理事会に推薦することとした。

【広報委員会】　委員長　垣内　景子

広報委員会では、現在ホームページのリニューアルを進めています。近年、ホームページに掲載する情報も増え、利用数も増加しています。それに対応するために、現在の古い形式のホームページを一新し、より見やすく使いやすいものにすることを目指しています。リニューアル後のホームページが、中国学に関するより充実した情報発信の場となるよう努める所存です。

ホームページに関して、ご意見ご要望がありましたら、お寄せ下さい。

事務局より

◎住所等の変更と会員名簿への掲載について

住所や所属機関の変更につきましては、速やかに事務局へお知らせください。特に学生会員の方が学生身分を喪失した場合には、必ずご連絡願います。電子メール、郵便、ファックス、あるいは会費納入時の振込用紙（ゆうちょ銀行払込取扱票）通信欄をご利用ください。

今年度10月発行の会員名簿には、８月末日までにお知らせいただいた会員情報を掲載いたします。それ以降の変更については次年度の掲載となりますので、ご了承ください。なお、以前は固定電話の番号（自宅または勤務先）のみを掲載しておりましたが、2013年度から携帯電話の番号も掲載できることといたしました。携帯番号を掲載することを希望される場合は、事務局までご一報願います（ご本人からのお申し出がない限り、既にご登録いただいている携帯番号を掲載することはありません）。

◎クレジットカードによる会費決済について

2017年度より、海外在住の会員を対象として、クレジットカードによる会費決済を開始しています。ご希望の方は、事務局まで電子メールでご連絡ください。折り返し、決済用ページの URL をお送りいたします。なお、利用可能ブランドは VISA・MASTER のみです。ご了承ください。

日本中国学会事務局　ファックス：03-3251-4853
電子メール：info@nippon-chugoku-gakkai.org
郵　　便：〒113-0034　東京都文京区湯島1-4-25
斯文会館内

ゆうちょ銀行振替口座
口座番号：00160-9-89927　加入者名：日本中国学会

訃　報

前号発行以降、次の方々のご逝去の報が届きました。謹んでご冥福をお祈りいたします。　（敬称略）

古田　敬一（中国・四国地区）　2019年１月４日
長谷川雅樹（近畿地区）　2019年３月５日

第71回大会開催のお知らせと研究発表の募集

会員各位：

陽春の候、会員各位におかれましては益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。

さて、日本中国学会第71回大会は関西大学が準備を担当し、本年10月12日（土）、13日（日）の両日、関西大学千里山キャンパスにて開催することとなりました。つきましては、下記の要領で研究発表を募集いたしますので、ふるってご応募くださいますようお願い申し上げます。

2019年４月吉日
日本中国学会第71回大会準備会代表
吾妻　重二

記

１．部　　会　：　一、哲学・思想
二、文学・語学
三、日本漢文（日本漢学・日本漢詩文・漢文教育など）
四、パネルディスカッション（次世代シンポジウム）

２．時　　間　：　一〜三は発表20分に質疑応答10分、四は報告、質疑応答含め全体で120分以内。

３．締　　切　：　６月29日（土）（当日消印有効。簡易書留、レターパック、EMS 等追跡調査が可能な郵送手段でお願いします）

４．応募方法　：　研究発表は、学術研究の最新の成果で、未発表かつ未公刊のものに限ります。

一〜三に応募される方は、氏名（フリガナ・所属）・希望発表部会・連絡先メールアドレスを明記の上、発表題目および概要（800字以内、日本語による）を、大会準備会まで郵送すると同時に、それらの電子ファイルを E メール（データ添付）により期日までに送付してください。E メール受信時には自動返信します。期日（日本時間）までに電子ファイルが届いていない場合、応募は受理できませんのでご注意ください。

四に応募される場合は、パネルの代表者がパネリスト全員の氏名（フリガナ、所属、メールアドレスも明記のこと）、パネルの題目と概要（1,200字以内、日本語による）を、上記と同様の方法により、大会準備会宛て送付してください。なお、学会、研究会あるいは研究機関（研究室等）によって組織されたパネルも可とします。

※執筆者による校正はないため、完全原稿でお願いします。

５．応募資格　：　研究発表の応募には、本学会会員資格が必要です。特に四については、パネリスト全員の本学会会員資格が必要となります。新入会員の方は、応募申し込み締切日までに会費の振り込みが必要となりますのでご注意ください。

６．応募宛先　：　〒564-8680　大阪府吹田市山手町3-3-35　関西大学 以文館３階 KU-ORCAS 内
日本中国学会第71回大会準備会　宛
E-mail:　japansinology71@hotmail.com

◎本年は、一、哲学・思想　二、文学・語学　三、日本漢文、四、パネルディスカッションの四部会を予定しておりますが、応募状況により調整することも考えております。各部会の発表は、質疑応答も含めて日本語でお願いします。なお、バランスも勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもありますのでご了承ください。

◎パネルディスカッションに年齢制限はありませんが、次世代を担う若手研究者からの応募を歓迎します。またパネルの内容は、学会ホームページに「研究集録」として掲載される予定です。

【問合せ先】　E-mail: japansinology71@hotmail.com（大会準備会事務局）
TEL: 06-6368-1834（KU-ORCAS〔ケーユー・オルカス〕）